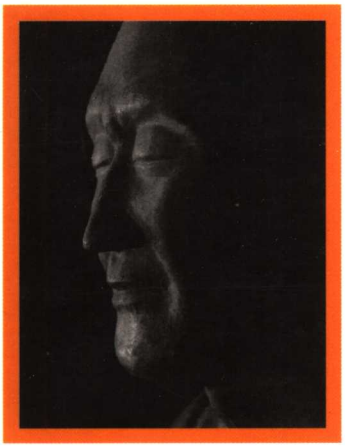


鑑真東渡

楽　敏　編著

田　建国
岩城浩幸　共訳
田　建華

五洲伝播出版社

图书在版编目(CIP)数据

鉴真东渡／乐敏著；田建国,(日)岩城浩幸，田建华译．—北京：五洲传播出版社，2005.10
ISBN 7-5085-0833-5

I. 鉴…
II. ①乐… ②田… ③岩… ④田…
III. 中日关系—文化交流—文化史—日文
IV. ① K203 ② K313.03

学术顾问：姜义华

鉴真东渡

编 著 者：乐　敏
译　　者：田建国（日)岩城浩幸 田建华
责任编辑：邓锦辉
装帧设计：田　林 李雁冰
制　　作：北京尚捷时迅文化艺术有限公司
　　北京原色印象文化艺术中心
出版发行：五洲传播出版社（北京海淀区莲花池东路北小马厂6号　邮编：100038）
承 印 者：北京世艺印刷厂
开　　本：889 × 1194mm 1/16
印　　张：15.5
字　　数：130千字
版　　次：2005年10月第1版
印　　次：2005年10月第1次印刷
印　　数：1-3100册
书　　号：ISBN 7-5085-0833-5/K · 722
定　　价：96.00元

本书图片除署名者外，均由乐敏提供

鑑真東渡

楽　敏　編著
田　建国
岩城浩幸　共訳
田　建華

五洲伝播出版社

目次

前書き……6

第一章　鑑真東渡……8

第一節　鑑真出家……8

第二節　東渡招請……16

第三節　六度の東渡……21

第四節　日本で仏法を弘揚……29

第五節　文化の恩人……38

第二章　徐福渡海……45

第一節　古代中日間の交流……45

第二節　史書に見る徐福渡海の物語……47

第三節　中国文化の伝播に対する帰化人の貢献……52

第三章　光武帝の金印……59

第一節　中日国交樹立の証拠……59

第二節　弥生文化と秦漢文化……61
第三節　稲作文化と各種農業技術の日本伝来……65
第四節　金属製造技術の日本伝来……70
第四章　王仁と儒教伝来……74
第一節　儒家の経典、初の日本伝来……74
第二節　初期日本の儒学……77
第三節　日本の政治に対する儒教思想の影響……80
第五章　空海入唐……87
第一節　求法と弘法……87
第二節　文化への貢献……94
第三節　仮名文字と日本の漢字文化……98
第四節　遣隋使と大化改新……100
第五節　唐代の中日関係……102
第六章　栄西と茶……110
第一節　栄西と「喫茶養生記」……110

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第二節　入唐僧と「弘仁茶風」の形成……112
第三節　宋元の茶礼と日本の「唐式茶会」……115
第四節　明代の中日茶文化交流と日本抹茶道の形成……119
第五節　長崎の「唐人坊」と日本煎茶道の形成……122

第七章　宋学伝来……127
第一節　禅宗の下での儒学……127
第二節　儒学の地方普及……132
第三節　儒学全盛と日本化……139

第八章　雪舟の「明」訪問……147
第一節　世界級の芸術大師である雪舟等楊……147
第二節　飛鳥時代以前の日本の芸術……151
第三節　日本の仏教美術……153
第四節　平安時代以後の日本美術……155
第五節　江戸時代の日本美術……159

第九章　東に浸透する西洋学……163
第一節　目を開けて世界を見る……163
第二節　漢訳の西洋書籍東瀛に伝わる……168
第三節　千歳丸の上海航海……177
第十章　扶桑に道を尋ねて……180
第一節　中日間文化関係の逆転……180
第二節　中国人の新たな日本人観……182
第三節　中国留学生の日本派遣……189
第四節　留日学生と中国の出版、文学界……192
第五節　留日学生と中国革命……197
訳者後書き……205

前書き

12年前、私はいささかの不安を抱いて、単身、東の隣国・日本への留学に発った。そして2年後に、中日両国民の友好を象徴する「鑑真丸」に乗って、日本海の波涛を乗り越えて故郷に帰った。

2年間の学生生活は、日本文化と中日関係について、それ以前に増して深い理解をもたらしてくれた。中日両国は一衣帯水の関係であり、海を隔ててお互いに眺めることができる。悠久かつ燦爛たる中国文化は、長きにわたって日本文化を孕み育ててきた。古代日本の勤勉な人々が、高度な知恵と地道な労働で新しい文化を創造した。それは固有の文化を基礎に、異文化を謙虚に学んだ結果でもある。

日本の著名な歴史学者、内藤湖南が言った「日本文化は豆乳であり、中国文化はそれを豆腐に凝固させた苦汁である」との指摘は的を射ている。近代になって日本は、西洋文化を吸収して近代化国家の行列に歩み入った。一方の中国は、今度は一転して日本を師として、近代化の発展テンポを速めていくことになる。両国民は、お互いの優秀な文

化を謙虚に吸収し、中日両国関係において友好的な詩篇を書き上げてきた。同時に知恵と寛容で、矛盾と確執を一つ一つ解決してきた。

しかし近年来、中日関係に屈折した局面が現れ、深い不安を抱くようになった。私はこれまで長い間、中日関係の発展に注目してきた。それだけに、中日関係の過去、現在、未来に向き合った時、歴史の流れに現れた美しい出来事に対する両国民の記憶を、喚起させなければならないという責任を感じた。私は、中日両国民が、世々代々友好的に付き合っていけるということを固く信じてやまない。

中日文化交流の歴史は、秋の紅葉、春の蕾のように思いを馳せ、大切にされるべきものでなくてはならない。この本の出版が、中日両国の未来、両国民の世々代々の友好往来に、ささやかながら貢献できることを願ってやまない。

2005年　錦秋の頃

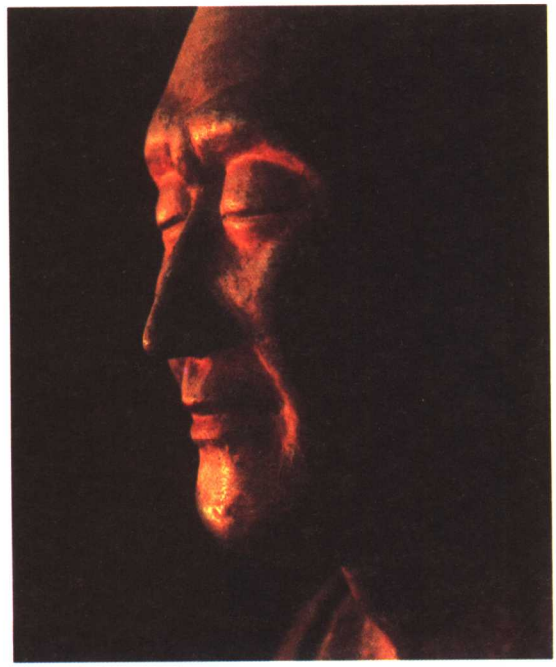
楽　敏

第一章　鑑真東渡

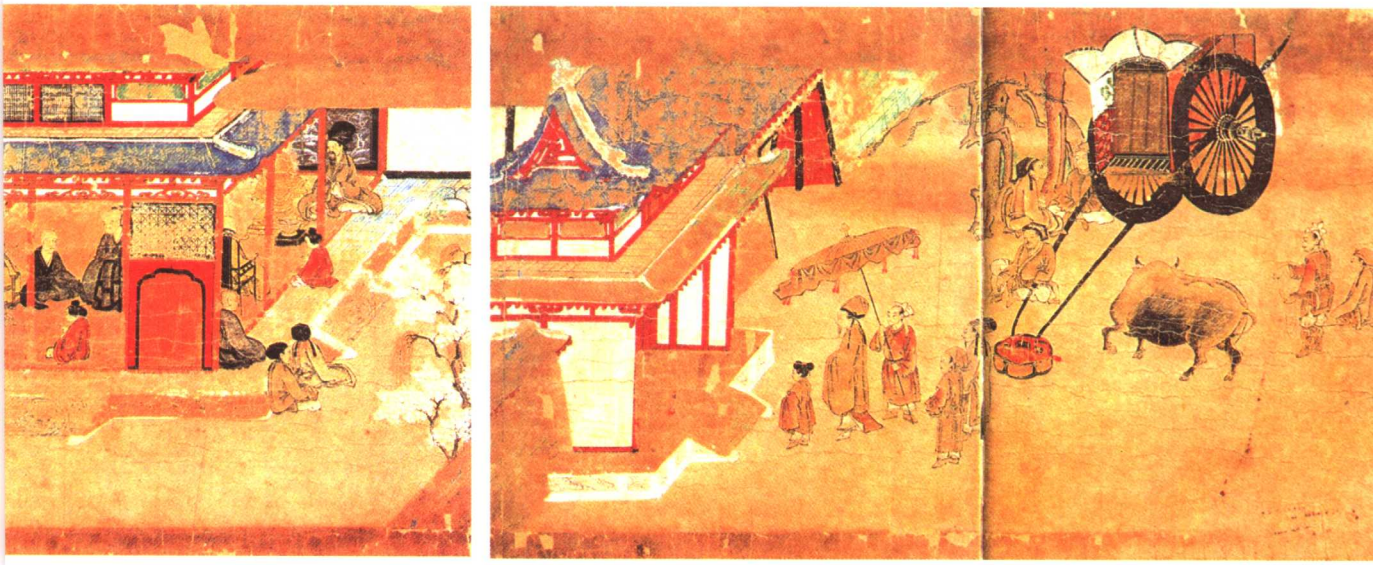
第一節　鑑真出家

鑑真和尚は俗名を淳于という。紀元688年、楊州江陽県(現在の楊州市東郊)の商家に生まれた。唐代の楊州は、水運が盛んで、商人が雲の如く集まり、天下一の富を誇るなど、長安と洛陽を除けば、最も繁盛する都市の一つであった。

東晋以来、仏教信仰が朝野の風潮となっていたが、楊州もその例外に漏れず、仏教が極めて盛んであった。鑑真の父は商業で生計を立てていたが、一方で仏教を篤信し、戒



鑑真像。奈良唐招提寺御影堂所蔵。田建国提供。



少年鑑真が出家を決意、父と大雲寺で智満禅師に拝謁。
＜東征伝＞絵巻、真人元開画。

を授けられて禅を勉強していた。そして、よく息子に仏教の経典の物語を話して、仏教の知識を教え込んでいた。それが幼い鑑真に多大の影響を与えた。

鑑真は、常々父に連れられて、線香をあげに行っていたことから、大雲寺住職の智満法師に親しんでいた。優雅で粛清な境内の雰囲気、巍々と聳えた厳かな堂宇、穏やかな微笑を湛えた仏像や、引きもきらぬ信徒の善男善女たち、功徳無量の物語などは、幼い鑑真を深く引き付けた。そして、いつしか鑑真の心の中に、善徳を積み、衆生を済度する大徳の僧になろうという念願が、芽生えていったのである。

702年、鑑真は出家して僧になるという希望を、父に伝えた。齢弱冠14歳の子供が出家を願うとは、仏に縁があると父は喜び、これに応じた。そして智満禅師への弟子入りを乞うと、大師は喜んで引き受けてくれた。

仏門の定めに従って、鑑真はまず剃髪せずに、「行者」と

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

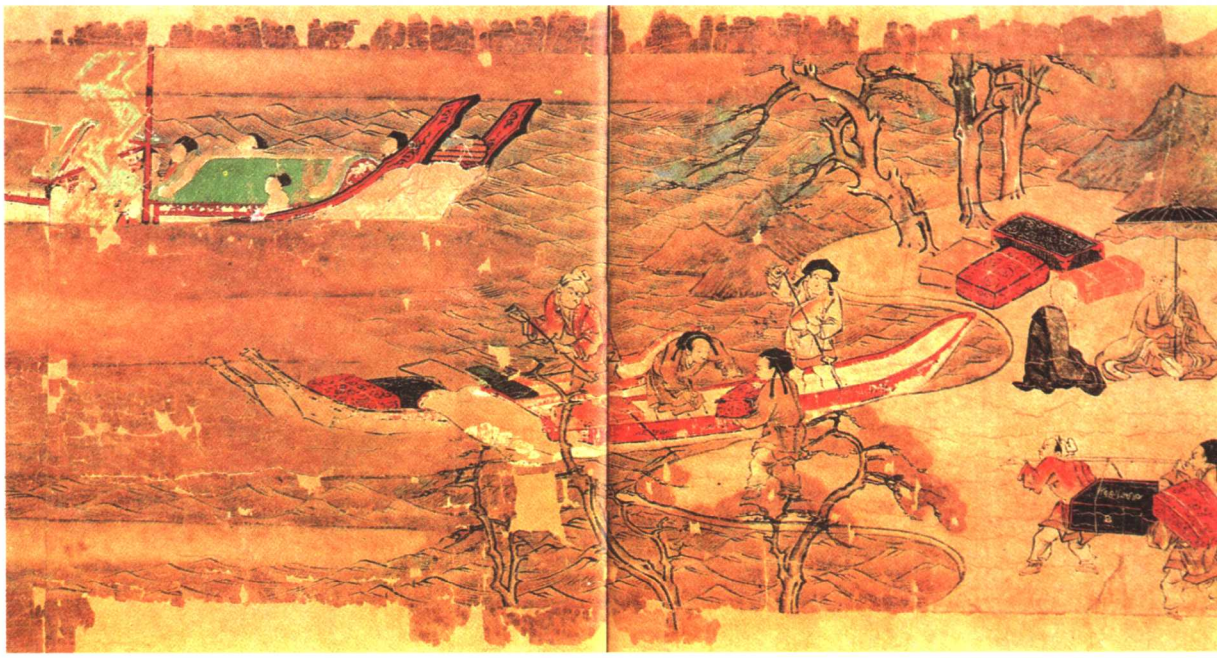
して労役に服することになった。勤勉で、読経を厭わぬ彼は、誰からも愛された。そして、官府度僧の日となった。彼は問題なく試験に合格して、度牒を受けた。その後、厳かな剃度式が行われ、鑑真という法名と沙彌戒を授けられた。

当時の社会状況では、仏門に入って受戒式や度牒受領に達するには、高い費用が必要で、普通の家庭で負担できるものではなかった。鑑真の生家は、それに耐えるだけの経済状況だったことが分かる。

大雲寺に入った鑑真は、智満禅師について仏法を勉強した。彼は仏学の勉強・研究に専心し、一心不乱に修行した。智満禅師の指導もあって進歩が早く、4年後には道岸禅師から菩薩戒を授けられた。

道岸禅師は当時の江蘇・浙江一帯の高僧であり、南山律宗の開山禅師である。もともと越州会稽（今の浙江省紹興）の龍興寺に常住していたが、神龍元年（705年）、

鑑真が大雲寺で剃度して出家。＜東征伝＞絵巻、真人元開画。



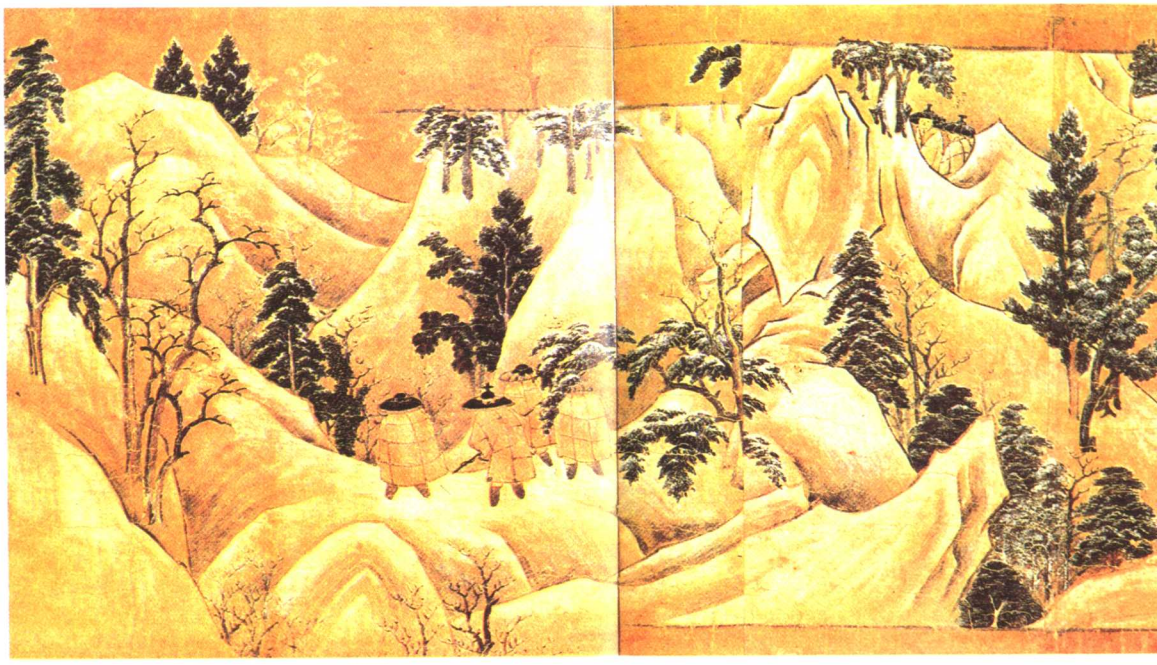
鑑真二回目の東渡に出発。＜東征伝＞絵巻、真人元開画。

楊州を通りかかって大雲寺に滞在していた時に、歳若い鑑真が既にして博学才頴、徳行高尚であることを知り、喜んで菩薩戒を授けたのである。

唐朝の受戒制度によれば、出家して剃髭・剃髪すると、まず沙彌戒を授けられるが、20才以降に比丘の律儀戒を授けられて、初めて僧侶の資格を取得することになる。それから苦心して修練を積み、仏学の知識を十分備えて、菩提の心を持つようになり、菩薩の道を行って、はじめて菩薩戒が授けられることとなっていた。だから18歳になったばかりの鑑真が道岸禅師に菩薩戒を授けられるというのは、破格のことであった。

その名が国中に響き渡る高僧の授戒で、鑑真の名声も知れ渡るようになり、楊州では尊敬を集める名僧となっていった。一年後、道岸禅師の薦めで、鑑真は楊州の大雲寺を離れ、洛陽、長安へ遊学に出た。

鑑真はまず洛陽で一年学んだ後、景龍元年（707年）



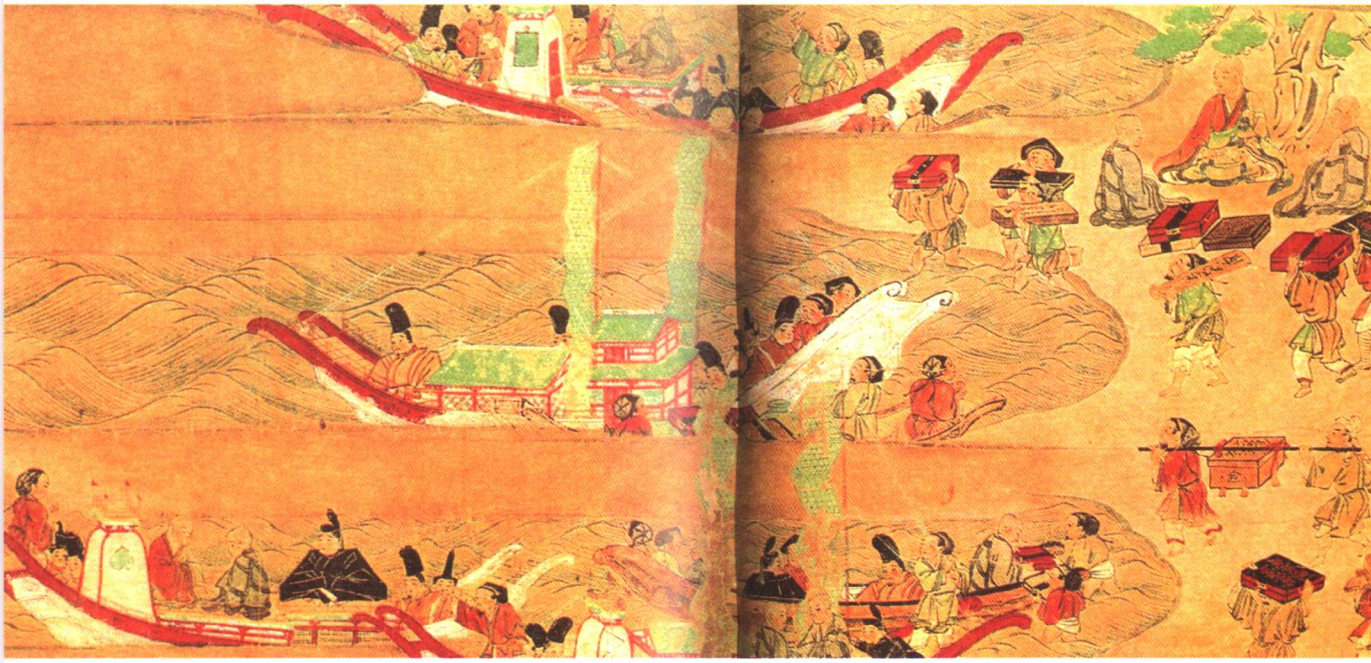
福州への途中で風雪に遭遇。＜東征伝＞絵巻、真人元開画。

の春に長安に入り、実際寺に寄宿した。そして道岸の紹介で、高僧弘景を師と仰ぐことになった。

弘景は律宗の名僧である一方、天台宗の大師でもあり、道岸と同じく唐の中宗から朝廷の授戒師として招かれた、徳と声望の高い大師である。

数度語り合って、鑑真は多くを得たが、弘景も鑑真が律学に精通していて、その前途が計り知れないものであることを知った。そして景龍二年(708年)三月二十八日、実際寺で鑑真に具足戒を授けたのである。鑑真、弱冠21才の時であった。一方、弘景は75歳の高齢であり、鑑真は彼が授戒した最後の弟子となった。翌年、弘景は引退して帰郷したが、その際には中宗皇帝自ら詩を作って送別した。

洛陽と長安という二都が、当時の中国の政治、経済、文化の中心であり、宗教が伝わってくるのも揚州より早かった。そこには寺院が林立し、高僧が雲集してい



遣唐使船帰航へ。＜東征伝＞絵巻、真人元開画。

て、揚州がはるかに及ばないところであった。鑑真はこの二都に学んで名刹と高僧を遍く訪ね、経典の研究に専念したので、26歳で揚州に戻った時には、既に極めて造詣の深い律学大師となったのである。

鑑真の時代は唐朝の開元、天宝の「盛代」であり、中国の封建経済、文化や芸術などが未曾有の高潮期を迎えていた。建築の長期にわたる歴史的発展は、特に漢、晋、南北朝を経て、この時代に成熟期に入っていた。

建築の名匠でもあった鑑真本人は、二都遊学前に、揚州の龍興寺と開元寺の建設を手がけたことがあった。そんな鑑真を強く惹きつけたのは、当時の洛陽、長安にあった荘厳華麗な数多くの寺院であった。それぞれに異なる風格で、王侯将相の豪邸にも引けを取らない寺の姿は、知識を求めようと念願している鑑真を捉えて止まなかった。

景龍二年(708年)の秋、鑑真は揚州に帰ることにな

難波に到着して歓迎を受ける鑑真。＜東征伝＞絵巻、真人元開画。

り、恩師の道岸に別れを告げに行った。当時道岸は、小雁塔の建造に没頭していたのだが、鑑真が建築に精通していることを知っていたので、彼を使おうと引きとめた。鑑真は、そこでの建造を通して、真剣に観察、勉強し、一部の設計、施工や装飾工事に自らも参加したことで、実務的な知識を少なからず身に付け、後日、仏殿や仏寺、仏塔の建築の名匠となったのである。

人を苦難から救い、貧乏や病から守るために、僧は医学を知らなければならない。インドから伝わってきた仏教の「五明学」の中に、「医方明」がある。それは専ら医学理論、処方、薬物の学問を研究するものである。長安は名医の雲集しているところでもある。鑑真が弘景法師から「五明医学薬典」を学んだ時、皇宮の「太医署」で数多くの名医に会い、「唐本草」を含む秘伝の処方を少なからず身に付けた。

鑑真の洛陽・長安遊学のもう一つの収穫は、東の隣

高官が続々と東大寺で礼拝。＜東征伝＞絵巻、真人元開画。

国である日本について一定の知識を得たことである。隋唐時代、日本は度々使臣や留学生を中国に派遣したが、その留学生のうち78パーセントは僧侶であった。彼らの大半は洛陽と長安に居留して中国の僧侶たちと広く交友し、経典の研究、学問の探求に勤しんだ。そして洛陽と長安で勉強・研究する間に聞いた中日間の仏教交流の伝説などは、鑑真に深い印象を残した。

はるか以前に、恵思という中国の和尚が円寂の後、日本国に転生して王子となった。この王子は仏を篤信し、仏教を大いに広め、衆生を遍く済して、遂に日本で仏法を興隆させた。

日本に長屋王という大臣がいた。漢詩に長じ、仏教を信じた彼は、袈裟を千着拵えた。そして袈裟ごとに「山川異域、風月同天、寄諸仏子、共結来縁」という4句の偈詩を刺繍した。これを託して唐朝でその当時有名だった僧侶に贈った。

こういった友好的な伝説や物語は、青年鑑真の限りない感慨を引き起こし、日本が仏法興隆に縁のある国だと思い至るようになったのである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com